

北海道民族学会通信

題字：椿坂小籬（鮎の会所属）

2004 年度研究会

開催日時・場所

日時：2004 年 6 月 27 日（日）

場所：北海道大学

- （1）若林 和夫（北海道民族学会会員）
「寛政期を中心とした関連文献に
おける オオウバユリ食用記述とそ
の周辺」
- （2）切替 英雄（北海学園大学）「アイヌ
語のもう一つの 1」
- （3）林 義夫（医療法人社団心友会）「伝
統日本食の復興を：治療文化人類学
的 考察から」
- （4）新森 紀子（（社）北海道開発技術セ
ンター）「都市の耐雪化と冬期生活の
変化に関する一考察」
- （5）原 文宏（（社）北海道開発技術セン
ター）「冬期交通と北海道の生活・産
業の変化に関する一考察」

日時：2005 年 1 月 22 日（土）

会場：北海道大学

- （1）乾 淑子（北海道東海大学）：「爆弾
三勇士」の造形—着物、文鎮など
- （2）林 義夫（医療法人社団心友会）：近
年の先進長寿県にみる短命化傾向
（～伝統的日本食の衰退）—蔓延化
するファーストフード化をスローフ
ード化への私達の 2、3 の取り組み
について
- （3）浅川 千登勢・石井 智美（酪農学
園大学）：2004 年夏のモンゴル遊牧
民と家畜
- （4）石井智美（酪農学園大学）：雪害後の
モンゴル遊牧民の健康と栄養
- （5）小杉 真智子（北海道大学）：ハンセ
ン病者のライフストーリーと療養所
コミュニティ
- （6）高泉 拓（北海道大学）：右翼ロック
バンドの人類学的研究

研究会発表抄録

以下には、論文寄稿した発表者以外の、掲載を希望した方の抄録のみを掲載しました。

爆弾三勇士という図柄

乾 淑子（北海道東海大学）

爆弾三勇士こそ 15 年戦争期を象徴する
最もこの時代らしい英雄であった。日清日
露の時代には語られる英雄の多くが将校で
あったのに対して、三勇士は兵卒である。
将から兵への戦の主体の移行を象徴するの
が彼らだった。

着物の図案を見ても、日清期の錦絵に描
かれるのは江戸時代の錦絵におけると同様

な将と将が馬上で切り結ぶ場面である。図
案職人が戦場を見ずに描いたからでもある
が、より多く市場に流通していた錦絵にお
いても似た状況であった。つまり、それら
の場面は大衆の好みにあっていたからこそ
支持され、購入されたのであろう。

日露戦争の時代には錦絵よりも盛んにな
った石版画においては将も兵も共に主役的
な扱いによって表現されることが増え、そ
の傾向は時代が下がるにつれて顕著となる。

昭和の初期になると雑誌の挿絵などにお
いてもすでに写真が一般的となり、そこで

は将も兵もそれぞれに被写体となる。また子供向けの着物の図案としての兵士は明治期と異なり、子供の顔や体格に置き換えて表現された兵士たちになる。これは兵隊さんごっこをしている可愛らしい子供にも見えるのだが、そこに登場する戦車や大砲などが生々しく、本物の兵士の情景を子供姿で描いていると解釈する他にない図柄だと分かる。

昭和の15年戦争の時代になるとそれが決定的になるのであるが、その嚆矢となったのが、三勇士であった。彼らは工兵であった。工兵とは銃や大砲で攻撃する兵ではなく、橋を架けたり、または作戦上必要なら橋を落としたり、穴を掘ったりするのを専門にする兵士である。もちろん戦場にいるのだから、時には自ら銃や刀を取って戦うこともあっただろうが、縁の下の力持ちである。

昭和7年2月22日午前5時、上海事変の最中の廟行鎮で、江下武二、北川丞、作江伊之助の3人は味方の攻撃のために敵の鉄条網を破るように命令された。しかし、敵も破られてはならじと応戦する中での破壊作業であり、彼らの前にすでに銃撃を受けて倒れ、鉄条網爆破に失敗した兵士たちがいた。そして彼らの番が来た時、長い破壊筒を三人で持った突撃の途中、一人がつかずいて倒れたために時間がかかりすぎて仕掛けた爆弾から逃れられずに戦死したことになる。この辺りの実際の戦況については諸説あるが、それに関する検討は本稿の主旨ではないので省略する。

彼らの戦死の直後から不自然なほどに取り上げられ、朝日新聞系列では肉弾三勇士、毎日新聞系列では爆弾三勇士として連日その記事が紙面をおどる。その戦死は浪曲、舞台、舞踊、箏曲、講談、映画（5本！）などになり、銅像も立てられ、三勇士饅頭、銘酒なども売り出され、三勇士の歌もいくつか作られた。公庄氏の収集した着物にも以下のような歌詞と楽譜が染められていた。

- 1 廟行鎮の敵の陣 我の支隊すでに攻む
折から凍る如月の 二十二日の午前五時
- 2 命令下る 正面に 開け歩兵の突撃路
装置の間無し 点火して 破壊筒をば
抱き行け
- 3 答えて「はい」と 工兵の作江、北川、

江下ら

凜たる心が 思うことこそ一つなれ

毎日新聞は懸賞募集をし、特等は与謝野鉄幹作の詩であった。昭和17年の初等科国語、音楽の教科書にも彼らのエピソードが採用される。

ラップ手であった木口小兵を除いては、兵が大きく扱われることはそれまではあまりなかった。これは個人が戦うのではない組織による近代戦であるということが明治を経て、一般に理解された結果であり、また多くの一般人を戦にいざなうためにも不可欠なのが、兵卒の英雄だったのかもしれない。

それにより、着物にも三勇士が描かれたものが登場する。しかし、三勇士柄には東郷元帥を描いた着物とは大きな違いがある。図1は帯であるが、**Bakudan Sanyuushi**とローマ字で書き、鉄兜が三つ描かれる。また図2は羽裏であるが、三勇士の戦死を伝える新聞記事と工兵を表現するツルハシ、三つの鉄兜であり、鉄兜の一つの中には戦場の地図が描かれている。その他にも漢字で「三勇士」と書き、鉄条網を配した柄や、子供姿の三人の兵が爆弾を持って走る図などがある。共通するのはこの三人の顔を忠実に再現しようというような図柄は一つもないということである。

翻って東郷元帥の柄を見ると有名な三笠艦上での指揮風景や、勲章で威儀を正した肖像を写したものなどのおなじみの図をそのまま借用した柄であり、東郷氏であることは一目瞭然である。有名な将軍と、昨日まで全く無名だった兵卒とは違うのは当然でもあろうが、鉄兜三つで表現するとか、漢字で代用するということまで行くとやはり、何か違うと感じる。ただし、これは着物の文様化の手法によることでもある。例えば玉手箱を描いて浦島太郎を、笹の葉とハサミを描いて舌切り雀を表現する「留守文様」という手法があり、それを三勇士に援用すれば鉄兜三つになるのだろう。また、寛文小袖には梅の枝に「鶯」という漢字を配して鶯という鳥を表現するなどの「葦手模様」という手法があり、それから出たのが「三勇士」という漢字での表現なのかもしれない。

しかし、やはり東郷元帥にはこれらの手

法は用いられなかったことを見ると三人はどんなに祭り上げられようと、英雄美談に登場する誰でも良い誰かにすぎないのではないかと思われる。被差別部落出身であるという噂の正否が繰り返し取り沙汰されるほどに貧しい家庭で育った三人は、死んで親に恩給をもたらした孝子でもある。良き兵士を生み育てた彼らの母親たちもまた女性の英雄として顕彰の場に引っ張りだされたりしている。それはその後十余年も続いた戦争を戦う上で必要な仕掛けだったに違いない。

本稿の執筆については奥西美知子氏、公庄れい氏のお世話になり、鹿島美術財団の

助成を受けました。記して深く感謝いたします。

参考文献

上野英信

1984 『天皇陛下万歳—爆弾三勇士序説』、筑摩書房

公庄れい

2004 「花園村より 12.モスリン」『綱手 no.188』、34-41、綱手短歌会

2004 「花園村より 13.モスリン補遺」『綱手 no.190』、60-66、綱手短歌会



図1 三勇士文様帯皮



図2 三勇士文様羽裏

伝統日本食の復興を： 治療文化人類学的考察から

近年の先進長寿県にみる短命化傾向 (～伝統的日本食の衰退)

林 義夫 (医療法人社団心友会)

病は口から入る(貝原益軒 『養生訓』)や、栄養で病気を治す(ジョナサン・ライト米国)の如く、私は現在本邦社会に蔓延しているメタボリック・シンドローム(生活習慣病)は食習慣病と別称されても妥当との考えがあり、基本的な生活習慣の第一は食事に始まると考えられている。平成14年度来、伝統的手作り日本食が従来からの地中海食

や中国食(薬膳)とともに世界の長寿食であると言われる如く、一方、本邦の伝統日本食はまた、本邦人の開祖である縄文人がその当時 1800 余年前にすでに長寿命であることが知られている(魏志倭人伝)。私達現代人はそのDNA(遺伝子)を継承していると考えべきである。

寿命は①遺伝子と②環境要因(食も含めて)で形成され、高齢者では②の要因が大きいことが知られる。すでに古く消滅した長寿村として吾が国では山梨県綱原村があるが、今日つい先達まで有名な長寿県であった沖縄も、長寿命は男女とも長野県にゆずり、女性は国内で3位、男性は27位と低下